OCHADAI GAZETTE

お茶の水女子大学学報　第249号　2016年7月16日

OCHADAI GAZETTE Summer, 2016

写真：村田 美七海（写真部）

希望溢れる未来の創造を目指して

CONTENTS

TOPICS

学長からのメッセージ…… 1-2
2016年度 入学式学長告辞

スペシャルタナーレクチャー開催報告…… 3-4

教員紹介…… 5
● 萩田 真理子先生
（基幹研究院自然科学系）

卒業生紹介 …… 6
● 小堀 香純さん
（生活科学部食物栄養学科卒業）

附属学校園からのお知らせ…… 7-8

キャンパス点描…… 9-10
● 第7回　ホームカミングデイを開催
● 平成28年度みがかずば奨学金授与式及び学部生成績優秀者奨学金授与式を挙行
● 平成28年度桜蔭会研究奨励賞・大学院博士後期課程研究奨励賞・錦織チサエ奨学金授与式を挙行

お茶の水女子大学
Ochanomizu University

学長からのメッセージ

2016年度 入学式学長告辞

新入生の皆さま、ご入学おめでとうございます。

本日、510名の新入生をお迎え致しました。お茶の水女子大学の教職員を代表して、心からお祝い申し上げます。

ご家族やご関係の皆さまにも、謹んでお祝い申し上げます。この晴れの日を、皆さまと共に、お祝いさせていただけますことを、まことに嬉しく思って居ります。

また、ご来賓の皆様には、お忙しい中、ご臨席を賜りまして、まことに有難うございます。今後共、若い学生さんたちの将来を温かくお見守り下さいますよう、お願い申し上げます。

今年度は、中国、韓国、台湾、スウェーデンからの留学生の方々をお迎えしています。この講堂に、日本の国旗と共に、留学生の方々のお国の国旗も掲げてありますが、毎年、国境を越えて、いろいろな国からお茶の水女子大学に留学生をお迎えできますことも、私たち教職員にとって、大きな喜びです。

留学生の皆さまには、故国を遠く離れた日本で学ぶことによって、学問的な刺激を受けるだけでなく、日本で生まれ育った学生さんたちとの交流の中で、異なった生活や考え方、文化や価値観の違いなどを学び、さらにはそれを楽しんで、さまざまな人々の、多様かつ豊かな魅力に触れて頂きたいと思います。

新入生の皆さまは、保護者の方々の愛情を一身に受けて、日々成長を重ね、本日を迎えられました。赤ちゃんの頃から、1日毎に一つ一つ覚え、習得して、一人の人間として成長して来られましたね。小さな頃からのご自分を思い出してみてください。例えば、小学生の頃、中学生の頃、高校生の頃のご自分と、今のご自分とを比べてみると、随分と成長し、変わって来たことを感じられるでしょう。

そして、大学におけるこれからの4年間に、皆さまはさらに大きく成長されることと思います。

大学では、学びの形がこれまでとは大きく異なります。待っていては何も成就できない可能性があります。出来るだけ早く、自ら学ぶ姿勢を身につけて頂きたいと思います。自ら望んで、学び、探求することによって、広く豊かな学問の世界を知り、様々な発見をすることが出来るはずです。そして、その学問の世界が、ダイナミックに変化し、発展していることにも気付かれることと思います。そんな中で、豊かな知識と知的好奇心に裏付けられた論理の進め方を身につけ、物事の見方や考え方や価値観を大きく変化させて、能力や人格を目覚ましく変化・成長させて下さることを期待しています。

また、大学生活の中で、皆さまの世界は、社会的な意味でも大きく広がります。様々な国や地域で生まれ育った友人たちや、自分とは違った能力や経験をもった友人たちとの出会いの豊かさは、高校時代とは比べ物にならないはずです。大学外での活動も広がることと思います。これまでとは、遥かに広がりと多様性のある世界が、皆さまを待っています。

異なった環境や価値観の中で育ち、しかもそれぞれに素晴らしい能力や人格を具えた人々と共に日々を送り、研鑽を重ねることは、皆さまを大きく成長させてくれるものです。それこそが、まさに大学生活の醍醐味だと思います。

皆さまには、お茶の水女子大学という新たな環境で、素晴らしい友人たちを得て、知的な活動や社会的な活動に、自主的、積極的に関わって頂きたいと願っています。皆さまの意欲的な活動を支援するために、本学では種々の制度や仕組みを用意しています。そして教職員たちは、皆様を心から応援します。

皆様もご存知の様に、お茶の水女子大学は、昨年11月29日に、創立140周年を迎えました。当日は、国の内外の各界の方々にご参集頂き、お祝い頂きました。

本学は、国が設置する初の女性のための高等教育機関「東京女子師範学校」として、1875年（明治8年）に文京区の「御茶ノ水」の地に開校され、その後、教育制度の変遷に伴って、東京師範学校女子部、高等師範学校女子部、女子高等師範学校、東京女子高等師範学校と組織と名称の変更を経て、1949年（昭和24年）に、誕生の地に因んだ「お茶の水女子大学」として、新制大学へと移行しましたが、創立以来、140年の長きに渡って、本学には

「教養と専門性を備えた女性リーダーの育成」が期待されて来ました。このことは、現在でも変わることなく、お茶の水女子大学のミッションとして受け継がれています。

創立以来、本学には、多くの先駆的な考え方をもった優秀な女子学生たちが入学してきました。そして、指導的な教育者、科学者・技術者として育ち、また様々な領域で社会基盤の充実に寄与する人材として育って、女性たちの社会進出が困難な時代から、女性の自立と社会的活躍を先導してきました。

お茶の水女子大学では、また、創立当時から国の内外で活躍する女性たちを育ててきましたが、さらに、2004年の、国立大学法人化に向けて、国境を越えた研究と教育文化の創造を目指し、世界中の全ての女性たちの夢の実現を支援するために、『学ぶ意欲のある全ての女性にとって、真摯な夢の実現の場として存在する』との標語を掲げました。そして、学びたくても学ぶことのできない開発途上国の女性たちをも含めて、国籍や年齢を問わず、女性たちの成長と資質能力の開発を支援するための活動を行って来ました。これは、本学が、世界中の、多様な文化と異なる価値観や考え方を持った人々と深く理解しあい、互いに切磋琢磨しながら、自らを成長させていくことのできる学園でありたいとの決意の表れであり、真の意味での学園のグローバル化を目指す活動です。

ボーダーレス化する世界では、対話と実体験を重ねる学びが益々重要になっています。次世代を担う若い方々には、国の枠組みを超えて、多様な世界の同世代の人たちとのつながりを深め、信頼関係を築いて互いに切磋琢磨することが求められます。本学では、今日現在で、世界24カ国、69大学との間で交流協定を結び、また種々のサマースクールや短期の交流事業なども開催して、多様な領域での交流と学びの機会を広げています。

本学では、さらに「リベラルアーツ教育」、「リーダーシップ教育」など、特色ある教育システムを構築して、若い女性たちが、社会の中で自らが何をすべきかを知るための「学びの場」を提供しています。本学に集う女子学生たちは、その学びの場を活用して、日本や世界の人々のために貢献できる人材となるために自己を磨き、将来への夢を育んでいます。

これから皆さまも、お茶の水女子大学の一員として、学びの場に加わるわけですが、新たな場で、新たなことに取り組んでいく時には、様々な困難が伴うことも予想されます。でも、困難を乗り越えるたびに、人は磨かれて、成長します。それが、自分でも気付かなかった能力や可能性に気付く機会ともなります。本学の校歌「磨かずば、玉もかがみも何かせん。学びの道もかくこそありけれ」にありますように、皆さまには、自分自身を磨き、それぞれの夢を実現させて頂きたいと願っています。

皆さまが夢の実現に向かって、困難を乗り越えていかれるよう、本学では種々の制度や仕組みを用意しています。そして教職員は、皆さまの成長を心から応援しています。

今、私達を取り巻く世界では、予測できない変化が起こり、人々の価値観や生活基盤が揺らぐ状況となっています。様々な国で争いが起こり、また大きな自然災害が頻発して、人々の穏やかな生活や生命が失われている状況があります。東日本大震災からの復興も、まだまだこれからです。

皆さまには、弱い立場にある人々への配慮を忘れず、自分たちに何ができるかを問い続けながら、本学での学びを深めて頂きたいと願います。

本日入学された皆さまが、このキャンパスで充実した学生生活を過ごされ、広い知識と豊かな想像力を備えて、日本と世界の希望溢れる未来を創造することのできる優れた女性として成長されることを願っています。

こころと身体の健康を大切になさって、学園生活を思い切り楽しんでください。

本日、お茶の水女子大学に入学された510名の皆さまとそのご家族、ご関係の皆さま方に、今一度心からのお祝いを申し上げ、これからの実り多い大学生活を心からお祈りして、お祝いの言葉を結びます。

改めまして、ご入学、まことにおめでとうございます。

2016年4月4日
お茶の水女子大学長　室伏 きみ子

学長からのメッセージ

2016年度 入学式学長告辞

スペシャルタナーレクチャー開催報告

スペシャルタナーレクチャーが開催され、大盛況に終わりました

2016年5月18日に、大学講堂（徽音堂）にて日本初開催となるスペシャルタナーレクチャーが開催され、300名近い学外者を含む1200名に上る方々にお越しいただきました。

当日は、英国ケンブリッジ大学ニューナム・カレッジ学長のキャロル・ブラック氏を講師に迎えました。講演では、英国及び世界で社会における女性の活躍がいまだに男性と同等とは言い難い現状を踏まえ、幼少の頃からの「女の子だから、男の子だから」という先入観の強い教育を変えていくことの重要性や、若い女性たちが自信をもって、失敗を恐れず物事に挑戦していくことの大切さ、また、男性や社会が女性の活躍を支えていくことの必要性を説かれました。キャロル・ブラック氏は、ケンブリッジ大学において、女性のいくつものリーダーシップ教育を運営・実践しておられ、若い女性を育てることへの情熱あふれる、含蓄のあるご講演となりました。

キャロル・ブラック氏のご講演ののち、本学名誉博士の遠山敦子氏によるスペシャルゲスト講演が開催されました。遠山敦子氏は、女性の上職位での活躍が乏しかった時代にキャリアを積まれたご経験を通して若い女性たちに励ましのお言葉をくださったほか、21世紀の困難をどのように乗り越えていったらよいのかについて、若者たちへメッセージを送られました。

キャロル・ブラック氏

略歴：大英帝国勲章（DBE）受勲。王立内科医協会会長、王立アカデミー理事長などを歴任したのち、現在、王立内科医協会及び英国医学院フェロー。ケンブリッジ大学ニューナム・カレッジ学長をつとめる傍ら、英国保健省及び英国公衆衛生庁の衛生・労働専門委員として活躍する。設立を手掛けたロンドンのロイヤル・フリー・ホスピタルの研究センターは、硬皮症等、結合組織の疾患の研究・治療で世界をリードする。

本学HPでは、当日のご講演の様子を動画で
www.ocha.ac.jp/tanner/ja/

スペシャルタナーレクチャー記念レセプションが開催されました

スペシャルタナーレクチャー終了後には皇后陛下をお迎えし、記念レセプションが開催されました。皇后さまは講演者のキャロル・ブラック氏と遠山敦子氏をはじめ、学内外関係者とにこやかに会話を交わされました。

遠山敦子氏

略歴：東京大学法学部卒業後、文部省初の女性キャリアとして入省。高等教育局長、文化庁長官、駐トルコ共和国日本国大使、国立西洋美術館長を経て、2001 年小泉内閣の文部科学大臣に就任。その後、新国立劇場運営財団理事を務めた。現在はトヨタ財団理事長、日本いけばな芸術協会会長など。

スペシャルタナーレクチャーについて

タナーレクチャーは、アメリカの学者かつ実業家であり、また博愛主義者でもあったオバート・クラーク・タナー氏によって設立されました。オバート・クラーク・タナー氏は、この講義が人類の知的かつ倫理的営みに貢献することを願い、また人間の行動と価値についてのよりよい理解を求めるものだとしています。

タナーレクチャーの講演者は、「Human Value」の分野における際立った功績と傑出した能力が認められる方々です。講演者は、哲学、宗教学、人文科学、科学、創造的芸術、学問的職業(神学・法学・医学) もしくは公的または私的取り組みにおけるリーダーシップを発揮した方々の中から選出されます。この栄誉は、国際的かつ異文化をまたぐものであり、民族、国家、宗教、また観念形態のすべてを超越して優れたものに与えられます。

タナーレクチャーは、これまでハーバード大学(米国) やオックスフォード大学(英国) など、世界を代表する大学のみで開催されてきましたが、これまでに行ってきた大学以外の大学でも特別に行う、スペシャル・タナーレクチャーが開催されるようになりました。このたび、本学でのグローバル女性リーダーシップ教育に関心が集まり、日本初のスペシャル・タナーレクチャー開催校に選ばれました。

ご覧いただけますのでぜひご覧ください。

スペシャルタナーレクチャー開催報告

教員紹介

今回の「教員紹介」にご登場いただくのは、自然科学系の萩田真理子先生です。萩田先生は理学部数学科に所属され、暗号の開発などにも携わっておられるとか。どうぞインタビューの様子をお楽しみください。

次世代の標準暗号を開発するのが目標です。

Hagita Mariko
萩田　真理子

Q 出身地、ご経歴、ご専門についてお聞かせください

さいたま市出身です。本学の理学部数学科に入学しましたが、実は卒業しておりません。3年生から「飛び級制度」を利用して修士課程に進学しました。修了後、慶應義塾大学大学院理工学研究科博士課程へ進み、学位(博士(理学))を取得しました。その後、慶應義塾大学環境情報学部専任講師、名古屋工業大学工学部講師を経て、本学の情報科学科の助教授に着任し、2012年4月に数学科に異動しました。専門は組合せ論、応用数学です。

Q どんな子ども時代、学生時代を過ごされましたか？ご専門を選択されるようになったきっかけなど含めて教えてください

小さい頃から数えることが大好きでした。数学と物理が好きになって、高校生のときに「数理の翼セミナー」に参加しました。これはフィールズ賞受賞者の広中平祐先生により創始されたもので、各都道府県から一人ずつくらいの数学好きの高校生を集めて、有名な研究者の講演を聴かせてくれるセミナーです。そのときに会った方々が魅力的で親切な方ばかりで、私も数学をやろうと思い、数学科に進学しました。

高校で習う組合せや確率が好きでしたので、大学でも組合せ論を勉強したいと思っていました。私が入学した当時、お茶大の数学科は純粋数学の専門家を揃えている正統派の数学科で、応用数学に分類される組合せ論の専門家はいませんでした。そのためお茶大で代数学を学ぶ傍ら、2年生のときに、グラフ理論で有名な慶應義塾大学の榎本彦衛先生のところに、組合せ論のゼミを見学させてくださいと訪ねていきました。

榎本先生のもとではLint, Wilson著の"A Course in Combinatorics"という本を、私も含めた学生三人で輪講を始めたのですが、半年くらいで他の二人はやめてしまい、一人になってしまいました。そこで当時、榎本先生も参加されていた、毎週土曜日に東京理科大学にグラフ理論の専門家が集まるセミナーがあったのですが、そのセミナーの前に続きを読むことになりました。当時はまだ新しい本でしたが、今では高く評価されている大当たりのテキストだったこともあり、グラフ理論セミナーに集まる方のうち、複数の先生方がセミナー前の時間に行う私の発表を聴きに来てコメントしてくださるなど、大変贅沢なゼミでした。この本を最後まで読み切るのに3年ほどかかり、終わる頃には私は学部を中退して修士課程の院生になっていました。

博士課程は慶應の榎本先生の研究室に進学しました。関連する分野の教員と、博士課程の大学院生も多く集まっている、大変恵まれた環境で勉強することができました。その頃に一緒に勉強した人たちは今も大切な研究仲間になっています。

Q 研究生活で印象深い出来事について教えてください

擬似乱数メルセンヌツイスタ(MT)の提案者の松本眞先生他と共同で、MTを暗号用に変換してCryptMTとFUBUKIという2種類の暗号を作り、ヨーロッパの暗号学会Eurocryptでストリーム暗号の標準を決めるeSTREAMというプロジェクトに応募しました。FUBUKIは選考の前半で候補から外れてしまいましたが、CryptMTは最終選考である第3段階まで残りました。最終的には残念ながら採用されませんでしたが、そういう大規模なプロジェクトに応募して、自分達の開発した暗号がどのように比較、選考されるかというのを見られたのは貴重な経験でした。FUBUKIはストリーム暗号ではなくブロック暗号という別のタイプの暗号に適したアイデアで作った暗号なので、いつかブロック暗号版のFUBUKIを、現在の標準暗号AESに代わる次世代の標準暗号にすることを目標に現在も研究を続けています。

Q ご専門以外のご活動、特に学外でのご活動について教えていただけますか？

お茶大ピアノ班のOG会の演奏会で毎年演奏しています。理学部の教員や研究室の学生にも趣味で楽器を演奏される方が多く、最近は一緒に参加してくださっています。次回は他の教員の方々とご一緒に、ドヴォルザークのピアノ五重奏を演奏する予定です。

最近、物理的な音についても趣味で研究を始めました。今はピアノで和音を弾く時に打鍵する順番によって和音に含まれる倍音の音程が違う理由を、音を聴き比べたり強制振動の式を眺めたりしながら考えています。たとえば、ピアノでファ、ラのb、ドの和音を弾くときに、響きの中に含まれているファの6倍音、ラのbの5倍音、ドの4倍音は同じ2オクターブ上のドの音ですが、少しだけ高さが違います。平均律での振動数は、それぞれ、

$174.614 \times 6 = 1047.68\,\mathrm{Hz}$
$207.652 \times 5 = 1038.26\,\mathrm{Hz}$
$261.626 \times 4 = 1046.50\,\mathrm{Hz}$

くらいです。この3つの音を和音で弾くと、最初に弾いた弦の方が後から弾いた弦の音に共鳴してさらに振動するので、倍音のドの音は、先に弾いた弦の出す音の方が大きくなると予想しています。正しければ、どれを先に弾くかで音程が少し変わることになり、ドの4倍音を低めにとりたければラのbを一瞬早く弾き、高めの方が良ければ一瞬遅れて弾くと良いと考えられます。

Q 最後に、お茶大生に向けてメッセージをお願いします

お茶大生は社交性、協調性に優れた真面目な努力家が多く、大変優秀だと思います。学生の間は、失敗しても成果が上がらなくても良いのですから、もっと自由に何でも興味を持ったことに思い切り取り組んでみて欲しいと思います。卒業後は、どこに行っても好かれるでしょうし高く評価されるでしょうから、自信を持って活躍していってください。

文責：基幹研究院自然科学系　教授
曹　基哲

卒業生紹介

国際的視野を育てる家庭科教育
～家庭科教育から社会に対してできること～

Kobori Kasumi
小堀　香純

横浜市立
中和田中学校
家庭科教諭

東京都出身
2008年　お茶の水女子大学生活科学部食物栄養学科卒業
2010年　同大学院人間文化創成科学研究科博士前期課程
　　ライフサイエンス専攻食品栄養科学コース修了
2010年～2013年　マレーシアのクアラルンプール日本人学校で勤務
2013年～2016年　横浜市の公立中学校で家庭科教員として勤務
2016年～　横浜市教員として採用

家庭科の教員になるまで

大学に在学していた時、ただ先生に勧められ、教員免許を取得しました。教師になりたかったというより、様々な視点から食品について学びたいという思いからの選択でした。

教育実習は忙しくも充実した実習でした。しかし、教師になろうという思いにはなりませんでした。もともと、食品会社に就職し、商品開発を通して、日本の食事情をよりよくしていきたいという思いが強かったためだと思います。しかし、実際、就職活動をし始め、様々な企業の説明を受ける中で、自分の思いと企業の考えの違いに戸惑いを感じるようになりました。企業が自社の商品を売るための商品開発ではなく、食の改善により強く興味を持つようになり、そのための教育の重要性を考えるようになりました。そこで、家庭科の教員になろう、と決めました。

日本人学校に勤めて

教員採用試験は終わっていたため、応募できる学校を探していたところで、日本人学校の教員という募集を見つけました。日本人学校とは、海外で働く日本人の家族のための学校であり、世界各地に日本人学校はあります。文部科学省が教員を日本人学校に派遣するのですが、ちょうどその時、人数が足らないため、一般からの教員募集を行っていたのです。すぐに応募しました。どの国に行くのか分からないまま、面接を受けた結果、私の赴任先はマレーシアのクアラルンプールに決まりました。大学院を出てすぐにマレーシアに移り、その後３年間をクアラルンプールの日本人学校で家庭科教諭として勤務しました。

文化の違いを感じることが好きだったり、周りのサポートもあったりと、初めて社会に出た不安や海外生活への戸惑いは、それほど感じずにすみました。

マレーシアは、マレーシア系、中国系、インド系の民族が暮らす国です。日本人学校へは両親のどちらかが日本人の場合に入学できるため、ハーフの子ども、マレーシアでしか生活したことのない子ども、日本から来たばかりの子どもなど、さまざまでした。

日本と同様の教育を、という目的をもつ日本人学校ですが、難しいこともありました。イスラム教徒の児童生徒がいるため、豚肉を使った調理や断食中の調理はできない。ゴミの分別がないため、ごみの捨て方の学習が難しい。自宅の周りの地域の様子を調べる学習をしたくても、治安上児童生徒だけで歩き回れないところも多く、宿題にできない、といったことです。反対に、海外だからこそできたことも多くありました。たとえば、民族衣装を着て登校する日があったり、マレーシアと日本の似たおやつを作って比べてみたり、世界の生活様式の違いを見て調べてみたり、現地校と交流して実際に体験的に文化を学んだり。大変なことも多かったですが、工夫次第でどんどん児童生徒の視野や考え方が広がってくる様子を、楽しく感じていました。

日本に帰ってきて

３年の任期を終え帰国し、横浜市の公立中学校で、産休や育休の代替教員である「臨時的任用職員」として勤務し始めました。そして、３年後、平成 28 年度４月から正規職員として横浜市で家庭科の教員として勤めることになりました。

日本では様々な研修も多く、様々なサポートを受けられたり相談ができたりすることから、自分の授業力や指導力に磨きをかけることができます。ただ、３年の海外での経験があったからこそできること、伝えられることも多いと感じています。衣食住の文化の違いといった家庭科の面では、実際の体験や写真、資料があることで、生徒の理解をより深められていると実感しています。また、異なる文化圏で生活して必要性を感じた、幅広い視野を持った生徒の育成にも力を入れています。自分と違うところを認められる、受け入れられるという国際的な幅広い視野を持つと、日本国内ではもちろん、世界に羽ばたき活躍する人に成長していけるのではないでしょうか。

家庭科教諭と家庭科教育

教員採用試験は年に１回、家庭科の募集は都道府県にもよりますが若干名、倍率は 10 倍～20 倍という狭き門です。採用試験を通過するのは大変ですが、家庭科の教員は女性が多く、産育休をとる方も多いので、常勤、非常勤であれば毎年仕事は必ずと言っていいほどあります。もちろん、正規教諭として雇用されることで、そういった保証がしっかり受けられるため、仕事も家庭も両立して考えられるのではないかと思います。

中学校家庭科の教育は現在、年間 87.5 時間と、我々が義務教育期間に受けていたよりもだいぶ減少しているという現状があります。便利なものも増え、たとえば、食分野でいうと、中食や外食産業が増えたことで、自炊しなくても生活できるようになってきてはいます。ただ、その中でどんな食事を選ぶかは、その人の生活や体調にも大きくかかわってくるため、成人前からの教育が重要になってくることと思います。

家庭科教育は生活する力そのものを育成する教科です。私はこれからも家庭科教育を通して、児童生徒の生活する力、生きる力を伸ばし、社会に貢献していくことのできる生徒の育成に携わりたいと考えています。

文責：基幹研究院自然科学系　教授
赤松　利恵

わたしのオフタイム

新しいところに出かけて様々な風景を見たり、現地ならではの食事を味わったりすることもあれば、自宅でお菓子や小物づくりをすることもあります。いろいろな体験すべてが生徒たちに伝えられるネタとなるのは、生活する力を伝える家庭科教育ならではと感じています。

附属学校園からのお知らせ

附属小学校便り

サークルで輪になって対話する「てつがく」科の時間

学びをひらく―「てつがく」科の実践研究―

本校は、これまで取り組んできたシティズンシップ教育を基盤にして、昨年度から、文部科学省研究開発学校の指定を受け、新教科「てつがく」科の創設やカリキュラム開発を進めているところです。「てつがく」科の目標は、「民主的な社会を支える市民の一員として、創造的によりよく生きる基盤となる道徳性や人間性を養うために、自明と思われる価値やことがらについて主体的・能動的に真理を希求して、深く考えねばり強く問い続けたり、広く思いを巡らせ多面的・多角的・批判的に考えたりするとともに、理性や感性を働かせて生活を見つめながら思考し続けることを通して、前向きに他者とかかわり行動する姿勢を育む」と考えています。

では、自明と思われる価値について批判的に考えるとはどのような姿でしょうか。ある学年での出来事です。田舎でカブトムシの幼虫を捕った子が、学校に幼虫を持ってきたことを契機に「幼虫を学級で飼うか飼わないか」という討議が行われました。他の飼いたい子から、「カブトムシをベランダで飼えば、見えないから苦手な人も大丈夫なのでは」と十分に虫が苦手な人を思いやる意見が出され、それに対して「ベランダにいると思うだけでも、気になり授業に集中できないかも」という異なる意見が行き交ったあと…、子どもたちから「この問題は多数決では決めたくない」という声が何回も聞かれました。

注目したのは、昆虫が苦手な人から「幼虫を飼いたい人がいるのに、自分の意見で飼わないことに決まるのは、どうかと思う」や、「幼虫を見ると気持ち悪くなる人が一人でもいるなら、学級では飼わない方がよい」という譲る意見が相互に出されたことです。結局、少数者の意向を最大限に尊重し、物事の決定に、多数決を用いることにダウトをかけたことになります。数が多いということは、決して、その意見・意思が正しいことを保障するものではないことは、いくつかの歴史的事実からも明らかです。この議論では、相互に誠実な対話をすることで異なる立場の人々の間に、合理的な一致点を探っていくことを通して、物事の決定には多数決が当たり前だという価値観や思い込みを、立ち止まって考え直す機会が与えられました。

附属小学校では、このような「てつがく」的な学びを、教員と子どもが一緒につくっていくことを大切にしています。

防災・安全指導

附属小学校の子どもたちへの防災・安全指導について紹介します。附属小学校では、児童の「安全」を最優先に考え、そして、この児童の安全に力を入れることで保護者の「安心」につながるよう日々、全教職員で取り組んでいます。その一貫として、不審者対応訓練も含む年７回の避難訓練を行っています。

５月12日（木）の朝には、朝の登校時間帯、７時55分に緊急地震速報を受信し、地震に見まわれた場面を想定し、避難訓練を実施しました。登校時間帯、教師がすぐ近くにいなくても自分で自分の身を守ること、パニックを起こさずに冷静に行動することの大切さや、避難の方法などを事前に指導し、訓練を行いました。子どもたちは皆、冷静に行動し、校庭へ安全に避難することができました。写真は、その時の様子です。入学したば

かりの１年生も真剣に訓練に取り組んでいました。

写真には、登校姿の児童もいます。地震はいつ起こるか分からないことをこうした訓練を通して肌で感じてもらいたいと考えています。どんなときも冷静に自分の身を守る行動ができること、教師の安全指導をいかしながら、子どもたちが自分自身で考え適切に行動できることを大切にした避難訓練を行っています。

同時に、児童の所在確認や、登校途上の児童への対応等、教師の訓練も行いました。通学中に大震災が起こった場合は、児童がどこにどのような状態でいるかを把握し、場合によっては通学路に探しに行くことも必要となります。

本校では、大地震に備え、都市圏の交通網が完全に止まり、保護者がすぐに引き取りに来られない場面を想定し、３日間の備蓄食料や水も保管しています。毎年、この備蓄食料、水は更新しています。また、食物アレルギーにも対応できる非常食も準備しています。

いつ起きるか分からないからこそ、いつでも地震に対応できる力を育んでいきたいと考えます。学ぶ楽しみ、考える楽しさは、安心できる学びの環境があってこそ成り立つものです。常にそうした環境であり続けられるよう、小学校はこれからも子どもたちの命を守るために全力で取り組んで参ります。

附属学校園での出来事（2016年4月～6月）

【いずみナーサリー】

4月
- 新年度保育開始
- 避難訓練

5月
- 保護者会

6月
- 災害伝言ダイヤル試行
- 教育後援会総会
- 避難訓練（地震）

【附属幼稚園】

4月
- １学期始業式
- 入園式
- 保護者全体会
- 避難訓練
- ＰＴＡ総会
- ５歳児遠足
- ４歳児親子で遊ぶ日
- 同窓会ちぐさ会　第17回ホームカミングデー
- 誕生会
- 子どもの日の集い

5月
- 健康診断
- 親子遠足（新宿御苑）
- 誕生会
- 避難訓練（引き取り訓練）

6月
- 実習開始
- ５歳親子で遊ぶ日
- 誕生会
- 避難訓練
- ４歳児・５歳児親子ジャガイモ掘り
- ３歳児親子で遊ぶ日
- 公開保育研究会

【附属小学校】

4月
- 入学式
- 始業式・離任式・着任式
- 各学年保護者会
- 親子活動（１年）
- 校外学習（各学年）
- 委員会活動（５・６年）開始
- 避難訓練
- 全国学力学習状況調査（６年）
- かがみ会合同委員会
- 健康診断
- 新入生を迎える会
- 通学班別会

5月
- 授業参観
- 保護者総会
- 教育後援会総会
- かがみ会総会
- 避難訓練
- 郊外園活動（サツマイモ植え３・４年）
- 校外学習（２年：新宿御苑）
- 校外学習（１年：多摩動物園）
- 帰国児童教育学級保護者会
- 特別支援講演会（１年保護者対象）
- 教育実習開始
- 運動会

6月
- 校外学習（３年：新宿御苑）
- 避難訓練、引き取り訓練
- 郊外園活動（ジャガイモ掘り１・６年）
- 郊外学習（４年：高尾山）
- 土曜参観日

【附属中学校】

4月
- 入学式
- 始業式
- 保護者会
- １年オリエンテーション
- ３年学力テスト
- 歓迎会
- 任命式
- 避難訓練
- ３年修学旅行（東北方面：花巻・平泉・遠野・釜石）
- ３年全国学力調査

5月
- 健康診断
- 生徒総会
- PTA総会
- 教育後援会総会
- 保護者参観週間
- １年郊外園（サツマイモ植え付け）
- 体育大会

6月
- ２年理科校外学習
- １年保護者会

【附属高校】

4月
- 入学式
- 始業式・着任式・対面式
- 新入生オリエンテーション
- 新入生防災訓練（池袋防災館）
- ３年修学旅行（沖縄）
- 避難訓練（地震）
- 自治会選挙・歓迎会
- PTA総会
- 教育後援会総会
- 各学年保護者会
- 春季健康診断

5月
- １年 農場実習（サツマイモ植え付け）
- ３年 学力テスト
- １年 学年合宿（諏訪方面）
- ２・３年 スペシャルタナーレクチャー
- ２年 自国文化理解（文楽鑑賞）
- ２年 ＳＧＨフィールドワーク
- 台北市立第一女子高級中学生 来校
- 体育祭

6月
- 面談週間
- 自治会総会
- 学校説明会
- 保護者授業参観
- ３年 ＧＴＥＣ
- ＳＧＨ運営指導委員会
- 期末考査
- 教育実習

附属学校園からのお知らせ

キャンパス点描

第７回 ホームカミングデイを開催

校歌「みがかずば」合唱

廣瀬史子さんと加藤シルビアさんの対談

第７回目となるホームカミングデイを、５月 28 日（土）に本学において開催しました。当日は大勢の卒業生・修了生・在校生が集いました。室伏きみ子学長の挨拶、本学同窓会の内田伸子桜蔭会会長からのご挨拶の後、本学の発展に多大な貢献をされた方々に名誉学友記及び感謝状の贈呈が行われました。

全学企画イベント「お茶の水今昔」では、本学卒業生である廣瀬史子さん、加藤シルビアさんの講演と対談、そして本学の元学長で名誉教授の本田和子先生にご講演いただきました。貴重なお話を聞きながら、うなずいたり、笑ったりと本学卒業生と在学生が楽しいひとときを過ごすことができました。

午後の部では、学部・学科・コース企画による講演会や交流会、歴史資料館特別公開、卒業アルバム特別公開、在学生によるキャンパスツアー、お茶室「芳香庵」公開（呈茶）、大学グッズ販売などが催されました。

２年後の第８回ホームカミングデイで皆さまのお越しをお待ちしています。

平成 28 年度 みがかずば奨学金授与式及び学部生成績優秀者奨学金授与式を挙行

2016 年５月 25 日（水）、平成 28 年度みがかずば奨学金授与式及び学部生成績優秀者奨学金授与式を挙行しました。

みがかずば奨学金

学部生成績優秀者奨学金

みがかずば奨学金は、お茶の水女子大学へ入学を希望する受験生に対して、入学後の生活の目処をたててもらうことを目的として平成 23 年度に設立されたものです。今年度は、入試前に出願して内定を得た者の中から、本学に入学を果たした 22 名の学部１年生が受奨者となりました。

学部生成績優秀者奨学金は、学部３年に在籍する者のうち、１・２年次の成績、人物が特に優秀と認められた学生について、これまでの努力を評価し、今後一層の勉学を奨励することを目的として平成 23 年度に設立されたものです。今年度は、学部１・２年次から引き続き在学する本学学部３年生（中途に休学期間がない者に限る）の中から、厳正なる審査の結果、25 名の学生が受奨者となりました。

式典では学内教職員列席のもと、室伏学長から賞状を授与されました。

また、学長、青島桜蔭会副会長からお祝いと励ましの言葉がかけられ、各奨学金受奨者の中から１名ずつが、代表として謝辞と今後の学修・学生生活への意気込みについて挨拶を述べました。

本田先生講演

キャンパスツアー①

キャンパスツアー②

大学グッズ販売

食育ライブラリーで栄養指導（食物栄養学科）

平成28年度 桜蔭会研究奨励賞・大学院博士後期課程研究奨励賞・錦織チサエ奨学金授与式を挙行

2016 年 6 月 1 日（水）、平成 28 年度桜蔭会研究奨励賞・大学院博士後期課程研究奨励賞・錦織チサエ奨学金授与式を挙行しました。

桜蔭会研究奨励賞

博士後期課程研究奨励賞

錦織チサエ奨学金

桜蔭会研究奨励賞は、平成 19 年に本学同窓会の桜蔭会の助成により発足し、平成 25 年度入学者から一部制度を変更し入学前予約型奨学金となりました。本学学部在学者で、入試前に出願し、プレゼンテーション審査等を経て内定を得た者の中から大学院博士前期課程に進学した学生に贈られます。今年度は 20 名が受賞しました。

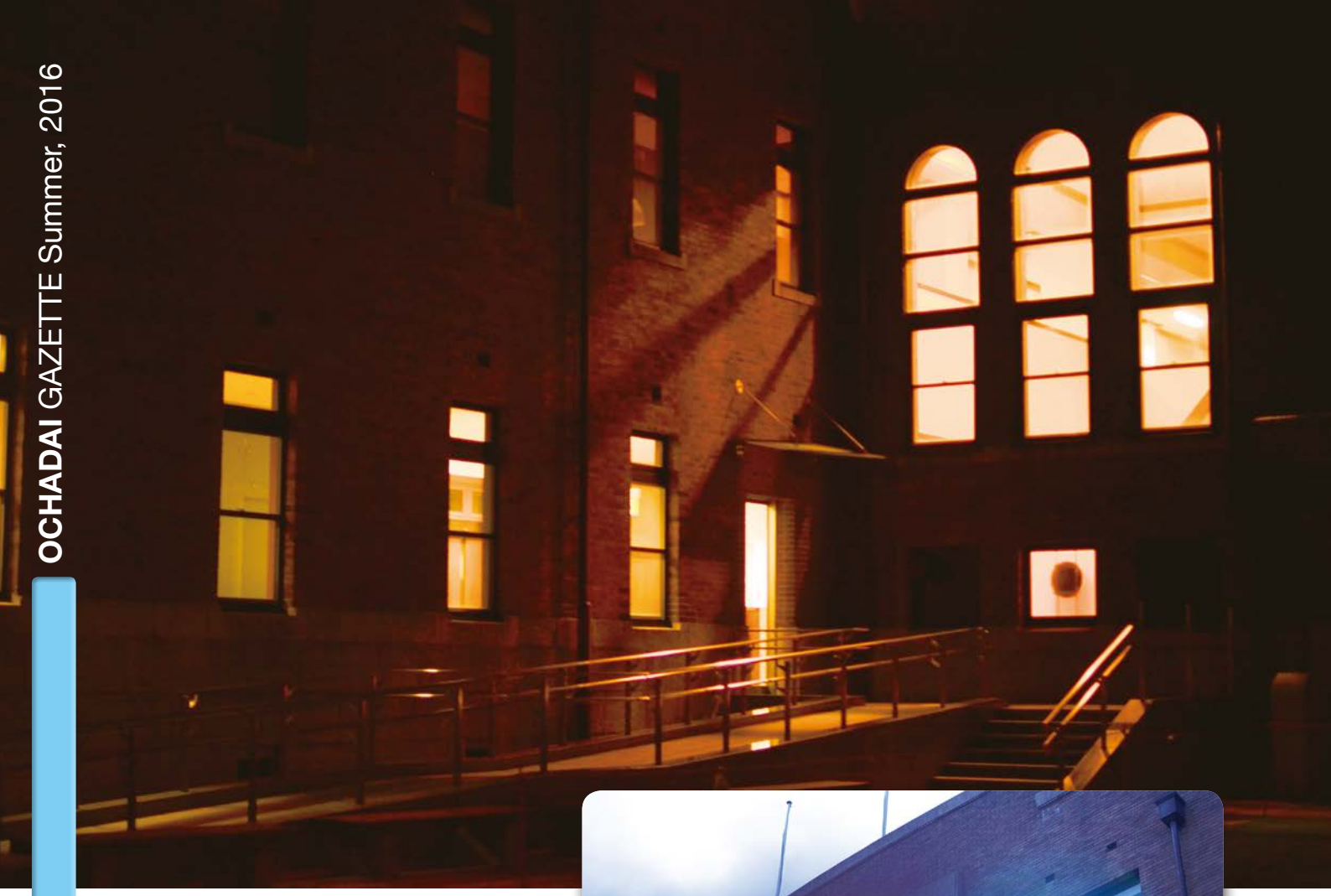
大学院博士後期課程研究奨励賞は、大学院生（博士後期課程）奨学基金をもとに平成 25 年度に新たに設立した入学前予約型奨学金です。本学大学院博士前期課程在学者で、入試前に出願し、プレゼンテーション審査等を経て内定を得た者の中から大学院博士後期課程に進学した学生に贈られます。今年度は 10 名が受賞しました。

錦織チサエ奨学金は、昨年度から大学院博士後期課程入学者を対象として新たに設立された予約型奨学金です。寄附者の錦織チサエ様は、昭和 38 年 3 月に本学文教育学専攻科を修了され、都立高校の国語科教諭をなさっていました。本学博士後期課程に引き続き進学する学生の研究奨励に資するご意向により、奨学金を授与することとなりました。審査等は大学院博士後期課程研究奨励賞と同時に行われ、今年度は 3 名が受賞しました。

式典では学内教職員臨席のもと、室伏学長から賞状を授与されました。

また、学長、青島桜蔭会副会長及び錦織様からお祝いと励ましの言葉がかけられ、各奨励賞及び奨学金受奨者の中から 1 名ずつが、代表として謝辞と今後の学修・学生生活への決意について挨拶を述べました。

キャンパス点描



写真：村田 美七海（写真部）

お茶の水女子大学学報　第 249 号
▽発行日：2016 年 7 月 16 日
▽発　行：国立大学法人お茶の水女子大学
東京都文京区大塚 2-1-1（〒 112-8610）

ご意見・ご感想はこちらまで
企画戦略課広報企画担当
電 話：03-5978-5105
FAX：03-5978-5545
E-mail：info@cc.ocha.ac.jp
URL：http://www.ocha.ac.jp/

本誌、お茶の水女子大学学報「GAZETTE」は、
本学ホームページにも掲載していますので、どうぞご覧ください。

Copyright (C) 2016 Ochanomizu University. All Rights Reserved